

地域政策課しまね暮らし推進室
主任 樋野 洋至

【研修先】 NPO 法人あしぶえ（松江市八雲町）

【研修期間】 平成 23 年 11 月 5 日、6 日、8 日～10 日
（その他、打ち合わせを 8 月 1 日及び 10 月 31 日に実施）

【研修内容】 カナダ「CORPUS」によるパフォーマンス「ひつじ」の公演スタッフ
○駐車場への整理・誘導
○舞台袖での大道具監視
○公演アンケートの作成、集計
○設営、運搬、清掃、飾り付けなど

【振り返り】

「あなたはどのように『あしぶえ』を研修先を選んだのか」

打合せと称し、あしぶえさんの拠点であるしいの実シアターに初めて訪れた際、園山理事長に問われた言葉だ。それほど深い意味はない問いかけだったのかもしれないが、私は一瞬躊躇してしまった。

「あなたは何をしに来たのか」

私にはそう聞こえた。そして、そのことに対する備えが十分でないままに訪問したことを見透かされたように感じた。私の研修は自省から始まった。

今回私が参加した公演は、カナダからはるばるお招きした「CORPUS」というパフォーマンス集団が、ひつじの生態を表現するというものだった。わずか 30 分足らずの公演であり、「演劇を観る」という視点からするとお客様が少し物足りなく感じるのではないかと、という想像をしていた。

ところが、実際にパフォーマンスを観ると、非常によく計算された、無駄のない構成であることに気がついた。私は舞台袖から都合 7 回観ることになったのだが、公演の度に細かな動きや演出を楽しむことができた。

ライブは観客と作り上げるもの、というのは演劇や音楽、お笑いにも通底するものだと思うが、同じ舞台を何度も観ることで、そのことを肌で感じる事ができた。



じっと見つめ、観察する子どもたち



カナダのメンバーとのお別れ

さて、職員短期派遣研修を通して感じたことをいくつか挙げてみようと思う。

先ず、NPOの活動が地域の多くの人の支えによって成り立っている、ということだ。

今回の公演は平日の公演が中心だったにも関わらず、毎日10人くらいの方々がボランティアスタッフとして、会場設営や場内整理、駐車場で誘導などに当たっておられた。

皆さんは非常に前向きで、明るく、そして自発的に行動されていた。自分たちが何のためにここにいるのか、という答えをハッキリと持っておられるように感じた。

それは、「演劇を通じて地域づくりをする」というあしぶえの活動に共感し、それを支えていきたいという思い、だったと感じた。

次に、規律やルールをととても大切にしている、ということだ。

印象的だった出来事がある。この研修の前に、県民会館で「セロ弾きのゴーシュ」の公演のスタッフをさせていただいたときのことだ。

開場前に、当日のボランティアスタッフで集合し、簡単に打ち合わせを行った後、開場時間までは余裕があったので、誰かが「みんなで集合写真を撮りましょう」と提案した。

その提案に園山理事長は「透明ガラスのむこうでお客さんが並んでいらっしゃるんだから、ダメです」と即座に、反射的に返された。その逡巡のなさ、ブレのなさに私は少なからず驚いた。また、研修期間中にも何度か、メンバーの中で共有できていない事柄があると、問題を先送りせず、その場で確認、情報共有を図る場面があった。

これらは些細なことだったのかもしれないが、毎日顔を合わせる仲間、同僚と、いい意味で緊張感を持って接していくことは、組織のパフォーマンスを高めていく上で重要なことだと感じた。

最後に、どのNPOも苦勞されていることだと思うが、資金的に厳しい環境で運営をされている、ということだ。

正直いって、あしぶえのように国内外で評価を受けているNPOが、給与や待遇の面でこれだけ苦心されているとは想像していなかった。もちろん、そういった条件はNPOの活動の評価とは無関係であり、一側面でしかないが、理念を持ち、社会のために貢献しようとしている姿を見ると、行政職員としての自分の姿勢や仕事ぶりは、果たして地域の方々に、県民の方々に評価を頂けるようなものなのか？と自問せざるを得なかった。

ちょうど今、新しい寄付税制やNPO法の改正を通じて、一定の要件を備えたNPOは寄付収入を得やすくなる環境整備がされつつあるようだ。NPOについて身近に感じるチャンスが到来しているとも考えられる。私も関心を持っていきたいと思う。

短期間での研修であり、私が垣間見たのはNPO活動のごく一部ではあったと思うが、色々と勉強をさせていただき、貴重な経験となった。

最後になりましたが、あしぶえの園山理事長、有田事務局長、小岩崎さん、米田さん、阪本さん、鳴尾さん、サポート会の皆さん、大変お世話になりました。ありがとうございました。



カナダメンバーとスタッフで